

# 日本中國學會便り

*The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai*

二〇一七年(平成二十九年) 四月三〇日  
第一號(通卷第三十一号)



## ●目録

巻頭言

〇二 再任の御挨拶

土田健次郎

〇四 太田辰夫氏の学問をめぐる近年の諸活動

竹越 孝

〇六 湖南大学岳麓書院建院一〇四〇周年記念  
国際学術フォーラムに参加して

佐藤鍊太郎

〇八 第18届中国唐代文学国際学術研討会に

参加して

益西拉姆

一〇 国内学会消息(平成二十八年)

一一 平成29・30年度各種委員会の構成

一二 委員会報告

論文審査委員会／広報委員会

二三 事務局より

二四 第69回大会開催のお知らせと  
研究発表の募集

編集●九州大学文学部 静永 健

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1

メールアドレス: shizuka@lit.kyushu-u.ac.jp

発行●日本中國學會

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内

ファックス: 03-3251-4853

メールアドレス: info@nippon-chugoku-gakkai.org

# 再任の御挨拶

理事  
長  
土田健次郎

このたび本学会の理事長を再び拝命することになりました。今学界は大きな転機にさしかかっています。この時期にどれほどのことができるか心許なくもありますが、会員諸賢の御指導御鞭撻のもと、

微力を尽くすつもりであります。

以前も書いたことですが、学界は世代交代の時期の最中です。団塊の世代は国立大学では既に定年を迎え、70歳定年制をしている私立大学でもあと3年でこの世代の在職者はいなくなります。かく言う私もこの部類で、3年後には所属大学を退職しますが、周囲には定年前に自主退職する向きも少なからず見受けられます。それには大学教員を取り巻く環境の急激な変化が陰に陽に影響しているように思います。

近年の大学の変化はまことに急激です。それまでは国立大学の独立行政法人化をはじめ、制度面での大きな改革はありましたが、今は教員生活そのもののあり方が大きく変わってきているという感があります。私の師匠の世代の大学教員は、今から見るとずいぶん余裕があったように思います。大学紛争中はかなりのストレスがたまる状況

でしたが、平穏な時は、年間の授業回数も、提出しなければならぬ各種書類も今のように多くはありませんでした。業績点数や掲載誌のランクなどもあまり問題にされていず、悠然と読書を楽しみ、興起こり稿成った時点で論文と随想の狭間に行くような文章を手近な雑誌に載せるといった文人型の教授が各専攻にいたものです。私の師匠などは二年に一回咯血しながら刻苦精励され、83歳まで学術論文を書かれましたが、中には還暦を過ぎられると悠々自適の先生も見受けられ、それも許される雰囲気があったように思います。

しかし我々の世代は大学業務に疲れています。提出書類は数が多くなっているだけではなく、期限がやたら短い。またこの年で、研究倫理だの利益相反だのハラスメントだのそれぞれ数時間にわたる講座をウェブ上で受講し、試験を受けしかもそれに合格しなければならない。その試験たるや、我々人文系の良識の範囲では解けない理系の特許問題とか実験ノートの記載方法だのまでが含まれています。博士学位請求論文の審査が格段に増加し、しかも盗作チェックのソフトにかけて問題が無いか確認させられるといったことが当たり前になりました。研究費使用も規制がますますうるさくなり、研究内容よりも研究費使用方法に神経を使わなければならない状況です。

学会関係も同じで、私が本学会の幹事をしていた時は、理事は名誉職のような趣も若干漂っていましたが、今は完全な実働部隊です。各種委員会も仕事が増えています。例えば学会報掲載論文の審査などは、昔は選挙で選ばれた学術専門委員会で比較的簡単な行程で行われていましたが、現在は論文審査委員会で段階を逐って厳格な手続きで進めています。全てにわたって情報公開がうるさくなり、学会報掲載を見送った投稿論文については執筆者にその理由を示すのが普通になっています。

お断りしておきますが、私はこういって悪いと言っているわけではありません。理由明記などは意味のあることだと思っております。ただこの件に限らず学会と大学の両方にわたって諸事負担が増え、研究や教育の時間が侵食されている状況を、現状認識として言っているのです。

また私は今年の3月まで8年間にわたって、大学系属の新設中高の理事長を、大学教員と兼任してきました。それゆえ昨今の中高の事情には通じているつもりです。本学会には中高で教鞭を執りながら研究を推進される会員も多くおられます。今中高の教員も、保護者対応などの問題が増加し、研究の時間の確保がたいへんになっているように思います。

このような趨勢に加えて、学会としてこれから新たな負担になるのは国際化への対応だと思います。特に英語による発信に力を入れざるをえなくなるのは時間の問題でしょう。中国や韓国では、英語の占める割合が少ない研究誌は低い評価しかあたえられなくなっています。おそらく本学会の学会報も今の英文の量だけではすまなくなるでしょう。その場合、論文執筆者が英語である程度の量の原稿を準備することになるでしょうが、そうは言っても簡単にできることはありません。最近ある学会では、論文の英文要旨は著者がネイティブの人に目を通してもらうことを義務づけました。その理由の一つは、学会事務局で英文の添削の世話までできないからです。この学会では以前、日本語が堪能なアメリカ人の教授が英文要旨を見てくれていました。一度その教授が評議員会で、提出者の英文が意味不明なので日本語で提出してくれと要望したので、みな思わず笑ってしまったことがありました。ただその方も大学を定年退職され、いたしかたなく執筆者サイドで作成した英文をそのまま載せていたのですが、その中にブロークンなものが目立ったわけです。理科系では英文添削を海外の業者に発注することが多いのですが、文化系は事情が異なります。文章の微妙なニュアンスが問題となるので外国発注では限界がありますし、理科系のような一定の記述パターンがあるわけでもありません。また周囲に英文を作成あるいは添削してくれるネイティブの方がいない場合は、困ってしまいます。今政府は英語教育に力を入れているので将来は自力で英文作成ができる会員も増えるかもしれませんが、現況ではやはり学会が今以上に補助をする必要があると思います。また論文要旨のみならず、学界展望や学界消息などの英語による発信も求められていくことでしょう。たまたま英語が

できる会員がいてそれに甘えるということではすまない作業量になるはずで、恒常的な体制が必要になります。このような状況に対しては、学会としてはそのためにかなりの額の子算を組む必要があります。この件はこれから大きな問題になっていくと思われます。

もっとも海外発信は英語だけでよいのかという議論も昔からありました。以前は本学会の学会報の論文要旨も中国語を許容していました。中国語だと世界中の中国学者が読めますし、周辺に援助してくれるネイティブも見つけやすいのは確かです。ただ肝心の中国でも英語での発信を義務づける傾向がますます強くなってきているので、趨勢としてはまず英語発信に力を入れざるをえません。なお一時は英語偏重だという声があり、英語、中国語に限る必要は無いという意見もありました。それに対しある会員が、それならスワヒリ語でもよいのかと発言されたりしたことを覚えています。

ところでこのような発信言語の問題はあるにしろ、最も重要なのが論文の内容であることは言うまでもありません。英文作成にかまけてこちらがおろそかになれば、本末転倒です。ところが現在困った問題があります。それはこのところの学会報の掲載論文数に如実に現れています。20篇掲載のところが、去年は13篇、一昨年は15篇、3年前は18篇、4年前は16篇でした。つまり掲載本数がどんどん減っているのです。これは関連領域の他学会でも見られている現象です。ここに影響しているのは投稿論文の質の問題もさることながら、若手研究者の人数自体が減少しているという如何ともし難い現実です。しかしだからといって学会報の基準を甘くするわけにもいきません。学会報の内容が国際基準を超えることでステータスが上がり、否応なしに学会報に投稿せざるをえない状況を作り出すことが、学会の存在意義を高めるはずです。一方で若手研究者へのサービスとしては、今準備しているホームページ掲載の「研究集録」によって、より多くの発表と研鑽の機会を提供することが有効ではないかと思えます。完成度の高い論文と清新大胆な論考の両方を本学会から発信できればと願っています。

# 太田辰夫氏の学問をめぐる 近年の諸活動

竹越孝  
神戸市外国語大学



神戸市外国語大学名誉教授・故太田辰夫氏(1916~1999)が20世紀を代表する中国語・中国文学者の一人であることに異論はなかろう。氏の名前は、一般の読書界には『西遊記』の訳者として知られているが、その研究領域は中国近世

文学のみに止まらず、むしろ中国語学者として世界的に高い評価を受けている。太田氏の中国語学における主な業績としては、『中国歴代口語文』(1957)、『中国語歴史文法』(1958)、『古典中国語文法』(1964)といった文法史関係の専著と、『中国語史通考』(1988)、『中国語文論集』(2冊、1995)等の論文集が知られているが、中でも『中国語歴史文法』は1987年に中国語訳されると、当該分野における日本人の著作としてナンバーワンの引用率を誇り、中国でもこの分野の研究に志す者の必読書となっている。小文では、太田氏の研究業績を回顧し、その学問を継承しようとする近年の動きについて紹介したいと思う。なお、太田氏の著作目録は『神戸外大論叢』第33巻3号(1982)、生前のインタビューは『中国語』第387~389号(1992)に掲載されており、いずれも高弟佐藤晴彦氏の手で『中国語研究』第50号(2008)にまとめられている。

## 一 ワークショップ「太田辰夫的漢語史研究」

太田氏は中国語の語彙・文法史に関して、ほぼすべての時代を網羅する形で数々の重要な論考を著しているが、それらは中国の学界においても尊崇の念をもって迎えられている。近年は中国語訳のある『中国語歴史文法』、『中国語史通考』以外の業績にも光が当たるようになり、その中国語史研究の全体像を把握しようという動きが広がっている。

2015年は太田氏の17回忌の年に当たり、折しも氏の学問に造詣の深い浙江大学の汪維輝教授が日本学術振興会のプログラムで来日されることになったため、東京大学駒場キャンパスで開催された日本中国語学会第65回全国大会(10月31日)において、「太田辰夫的漢語史研究」と題するワークショップを行った。様々な角度から太田氏の中国語史研究を総括し、太田学説をめぐる研究動向を跡付けるとともに、今後どのように発展していくべきかについて展望するのが目的で、発表と質疑応答はすべて中国語を使用した。

佐藤晴彦(神戸市外国語大学名誉教授)：太田辰夫先生的学問

竹越孝(神戸市外国語大学)：太田辰夫の近代漢語研究

山田忠司(文教大学)：太田辰夫の北京話研究

大西博子(近畿大学)：太田辰夫の吳語研究

汪維輝(浙江大學)：太田辰夫の漢語史研究在中國

発表の後には、佐藤氏が各人の内容に対しコメントを加えた。質疑では、太田氏による上古・中古漢語研究の重要性、また遼・金文人の漢語能力から見た「漢兒言語」説の妥当性などが問題となり、活発な意見交換がなされた。特



に、遠藤光暁氏(青山学院大学)が、中国で近世文法史研究が盛んになるのは、1980年代に梅祖麟教授(コーネル大学)が北京大学に滞在された折、講義の中で太田辰夫、入矢義高、志村良治といった日本の研究者を称揚したことが契機になったと紹介すると、ちょうど学会の招待講演を終えたばかりの郭鋭教授(北京大学)が、私もその場にいましたと応じるなど、世代の違う我々にとっても興味深い内容が多かった。このワークショップで発表された諸論文とコメントは、『中国語研究』第58号(2016)に収められている。

ワークショップ翌年の2016年6月11日、佐藤氏と筆者は、中国・清華大学で蔣紹愚・張美蘭両教授の企画により開催された「普通話」推行60周年記念「漢民族共同語研究」ワークショップに招かれた。その際に、『中国語歴史文法』の中国語訳者でもある蔣紹愚教授が定められた主要議題の一つは、「從六朝至明清、什麼是漢民族的共同語?什麼是“漢兒言語”?它們和明清的“官話”是什麼關係?」というものであり、太田学説がいまだに中国で影響力を保っていることを実感する機会となった。

## 二 太田辰夫文庫

神戸市外国語大学では現在、太田氏がかつて所蔵していた漢籍、新学書、和書、洋書、抜刷、複写物、手稿類等約900点を整理し、「太田辰夫文庫」として公開すべく作業中である。この蔵書は、太田氏が亡くなられて1年ほどした頃、ご遺族から相談があったのを機に、佐藤氏が中心となって残すべきものを選定し、本学に寄贈していただいたものである。その一端を紹介するため、2016年5月28日には、中国近世語学会研究総会(於神戸市外国語大学)において「太田辰夫文庫について」と題する共同発表を行った。まず筆者が蔵書の全体像、整理・目録化の現状、蔵書の特徴等について述べ、その後佐藤氏が太田氏の取書や学問等について語った。参会者には「太田辰夫文庫目録」漢籍の部及び複写の部(暫定版)を配布し、終了後には図書館で蔵書の一部を対象とする見学会を行った。

この文庫に特徴的な蔵書としては、太田氏の主要な研究テーマであった『西遊記』、『兒女英雄伝』、元刊雜劇の関係書や、『小額』、『春阿氏』等の清末民国期小説の他に、晩年に関心を寄せておられた『至正妓人行』や周憲王雜劇、そして『肉布团』、『杏花天』等の艶情小説類を挙げる

ことができる。また、漢籍の稀觀書としては、『滿漢成語对待』、『清文啓蒙』、『清文指要』等の滿漢合璧資料、『重刊老乞大』、『朴通事新釈』、『華音啓蒙』等の朝鮮資料、さらに九江書会本『官話指南』、『滬語指南』、『土話指南』等の官話関係資料がある。目録の一部は、前掲の「太田辰夫の漢語史研究」ワークショップ諸論文と同じく、『中国語研究』第58号に掲載されている。

太田辰夫文庫はまだすべての作業が終了していないが、他の部分も合わせた正式な目録を2017年中に刊行し、それと同時に正式公開できるよう準備が進められている。

## 三 『太田辰夫著作集』

さらに、単行本未収録の文章を集めた『太田辰夫著作集』の刊行も計画されている。きっかけとなったのは、2013年に浙江大学で開催された「元明漢語工作坊」(『日本中国学会だより』2014年第1号参照)において、中国側の主催者であった方一新・汪維輝両教授から、太田氏の単行本になっていない論文は日本側でまとめて刊行すべきだと言われたことで、まるでそれは日本の研究者の責務ではないかと叱咤激励されている如くであった。そこで、同会議の企画者であった遠藤光暁氏のサジェスションを得て、山田忠司氏と筆者が共同でその任に当たっている。

この著作集は、太田氏が生前ものされた文章のうち、その学問の中核をなす中国近世の語学と文学に関するもの以外にも、中国現代文学に関するもの、上古漢語ないしは漢文に関するもの、現代中国語文法に関するもの、さらには書評、回想、小品の類までを網羅的に収めようとするもので、紙媒体では難しいため、電子出版の形で刊行を目指している。本著作集には、収録した論著のすべてに解題を付すほか、事項索引と中国語語彙索引を作成して利用の便を図る予定で、中国語学のみならず、中国文学や日本の古典を専門とする人にとっても有用なものとなるはずである。

語学にせよ文学・哲学にせよ、我々は研究資料・研究手法の面でとかく新しいものを追いかけがちであるが、太田氏の諸著作はいまだにその価値を失っておらず、汲めども尽きぬアイデアの宝庫である。太田氏の残した遺産をどう咀嚼し、継承し、発展させていくか、さらにはそれをどうやって世界に向けて発信していくかは、最もその恩恵に与っている我々日本の後学にかかっている。

三浦秀一教授(東北大)「十三世紀北中国の程朱学と許衡の思想」

この他に、簡亦精博士(九州大学)が康熙、乾隆時期の台湾の書院を中心に書院祭祀中の文昌信仰と風水について報告しました。また、岳麓書院の研究員の田訪博士(京大留学)とも再会しました。日本からの参加者は30日午後には発表を終えました。初日の発表者は32名でした。宿舍の通程麓山大酒店での晩餐の後で、範立舟教授(杭州師範大)主催の酒宴に招待され、鶴成氏に伴われて、三浦氏、尾崎氏と共にご馳走になりました。その宴会で顧広義(華東師範大古籍研究所所長)、李若暉(復旦大)、匡劍(中国社会科学院)、張天傑博士(杭州師範大)、申緒璐博士(杭州師範大)と面識を得ました。翌日に発表を控えているにも拘わらず、皆さん大変な酒豪でした。さらに岳麓書院の肖永明教授から茶館に招待され、深夜に宿舍に戻りました。

翌31日は中国、香港、台湾、韓国からの参加者47名が発表を行い、夕方の閉幕式では、岳麓書院の朱漢民教授と鄧洪波教授がフォーラムの総括を行いました。フォーラムの日程、発表題目、参加者の所属、連絡先は、配布された『会議手冊』に記載されています。フォーラムの発表論文は、『儒学的歴史演進と伝播—紀念岳麓書院創建1040周年高端學術論壇會議論文集』上巻420頁、下巻385頁(湖南大学岳麓書院、長沙・2016/10/29~11/1)に収録されています。なお、帰国後、湖南大学から拙稿を『湖南大学学报』に収録したいという要望があり、ワード形式の校正原稿をE-mailで送りました。

小職を含めて、日本からの参加者は、書院史研究で著名な鄧洪波教授と面識があり、小職が参加を決めた理由も、旧知の鄧教授からの招待に応じるためでしたが、目的がもう一つありました。それは、長沙市に近い衡陽市にある王夫之の遺跡を訪問したいと思っていたからです。長沙に到着した29日の晩餐時に鄧洪波教授に三浦教授と共に王夫之の遺跡を訪問したいという希望を伝えたとこ、鄧教授には、すぐに衡陽師範学院中文系主任の朱迪光教授に連絡して、訪問できるよう手配してくれました。持つべき者は朋友です。朱迪光教授は、船山学社常務副社長、『衡陽師範学院学报』主編、湖南省船山学基地首席を兼ねており、『王船山研究資料索引』(中国文史出版社、2002)の編者です。

11月1日、北海道大学に交換留学したことのある馬麗

# 参加して 国際学術フォーラムに 建院一〇四〇周年記念 湖南大学岳麓書院

北海道大学  
佐藤鍊太郎

北宋時代の開宝九年(976)に創建された岳麓書院(湖南省長沙市)が建院1040周年を迎え、2016年10月30日と31日の二日間、湖南大学岳麓書院において、「儒学の歴史的進展と伝播」と題する国際学術フォーラムが開催されました。

フォーラムの論題は、(1)儒学の歴史的進展と伝播、(2)經典解釈と経学史の変遷、(3)中国書院史と伝統的教育制度、(4)中国書院と社会教化、(5)岳麓書院と中国儒学、(6)張栻と湖南学派および岳麓書院、の六項目でした。開幕式では岳麓書院院長の肖永明教授の挨拶に続き、張凱之教授(西北大学)、陳来教授(精華大学)、郭齐勇教授(武漢大学)と小職が祝辞を述べました。日本から参加した日本中国学会会員の発表題目を発表順に紹介すると次の通りです。

藤井倫明副教授(台湾師範大)「日本における儒家の『仁』説—浅見綱斎を中心に」

尾崎順一郎博士(東北大)「惠棟『古文尚書考』の辨偽と方法」

鶴成久章教授(福岡教育大)「水西精舎の歴史」

佐藤鍊太郎「明末清初の相対立する陽明学派史」

芳さん(湖南大修士2年)に付き添われて、三浦教授と共に地下鉄で長沙南駅に向かい、9:34長沙南駅発の高速鉄道に乗り、時速300キロで37分後に衡陽東駅に到着しました。料金は2等車で79.5円(日本円で約1,300円)でした。到着すると、朱迪光教授与李相勳副教授が駅まで車で迎えて来ていました。午前中は、蔡元培を記念して建てられた先進的な私立の湖南省衡陽県元培学校、北大附属衡陽元培幼稚園に案内され、盛彪理事長や衡陽県の船山研究者、胡国繁氏らから船山の精神に学ぶ初等教育の実施状況について紹介されました。昼食をご馳走になりながら、船山が晩年隠棲した湘西草堂や墓地、石船山を訪問したいと話したところ、同席したジャーナリストの甘建華氏らも一緒に参観することになり、二台の車で出発し、田舎道を通って、湘西草堂に到着しました。日本人が訪問したのは、王船山生誕365周年に当たる1984年9月25日に学習院大学の高田淳教授と原島春雄講師が訪問して以来32年ぶりとのことでした。小職は東大大学院在学時に高田教授と上原淳道教授が学習院大学で定期的で開催していた王船山『宋論』の読書会に参加したことがあり、原島氏からその時の旅行では悪路で大変苦勞したと伺ったことがあります。現地は車がすれ違いもできないような狭い舗装道路でしたが、車に乗って行ったので当時の苦勞を偲ぶ由もありません。ただ、慣れない道を運転して車を傷つけた李相勳氏には気の毒でしたが、感謝に堪えません。

湘西草堂を見学してから、大羅山の船山墓地を参拝し、最後に草深い石船山に登り、往事を偲びました。船山故居や墓地の写真はインターネットでも見ることができます。帰国後、甘建華氏からメールが寄せられ、我々が船山の遺跡を訪問した記事「陪同日本学者考察大儒王夫之隱居地」と写真を微博のwebに掲載したという連絡がありました。

1日の夜は衡陽東駅付近のホテルに宿泊し、翌2日午前中に衡陽師範学院を表敬訪問しました。『衡陽師範学院学報』編集部、文学院、船山学社、船山研究基地を見学し、熱烈歓迎日本学者云々という名前入りの紅い横断幕が掛けられた部屋に案内され、朱迪光教授等と質疑応答し、研究交流を行いました。昼食時には「洪家私房」という郷土料理店で辛めの衡陽料理をご馳走になり、帰途につきました。二年後の2019年には王夫之生誕400周年のシンポジウムを開催する予定だそうです。朱迪光教授と再会を約して長沙に戻りました。その日は鄧洪波教授から晚餐に招待され、親交を深めました。

11月3日には、宿舎の通程麓山大酒店から歩いて5分ほどの所にある岳麓書社を訪ね、『船山学刊』をはじめ新刊書を購入しました。近くの湖南師範大学出版社では『船山学報』を出版していますが、今回は訪問する時間がありませんでした。4日に長沙を出発し、北京で一泊して、翌日に札幌に戻る予定でしたが、スモッグのため4日に北京空港に着陸できず、山西省太原に一泊することになりました。北京に到着したのは5日の昼過ぎでした。4時間以上列んで6日の便を手配し、その日は空港近くのホテルに宿泊し、帰国するのに3日もかかりました。サービスの悪さに難渋しましたが、中国人の親切にも触れることができました。小職が利用したのは中国国際航空で、往復航空券は早期に購入したため格安の3万5千円でした。別の航空会社の乗り換え便を予約していた人は、遅延したため航空券を新たに買うことになり、大きな負担を強いられ、気の毒でした。なお、小職は今年の10月に貴州に出張する予定ですが、やはり、中国国際航空の格安往復航空券(3万5千円)を購入しました。

今回のフォーラムでは往復航空券は自己負担でしたが、それ以外の滞在費、食費については、岳麓書院、衡陽師範学院の提供でした。日本では科学研究費の支給を受けない限り、このような規模の国際学術シンポジウムを開催することは出来ませんが、岳麓書院は豊富な資金を持っているとのことでした。

日本の十倍以上の研究者を擁する中国や台湾では盛んに国際学術シンポジウムが開催されており、往復の旅費を提供する招待も多いのですが、日本からの参加者は極めて少ないのが現状です。30歳代40歳代の若手の会員におかれては積極的にシンポジウムに参加し、中国語で口頭発表、論文発表、研究交流を図っていただきたく、冗長な一文をしたためました。



# 第18届中国唐代文学 国際学術研討会に参加して

益西拉姆  
イシシラム  
日本大学芸術学部非常勤講師

2016年9月9日から11日までの間、第18届中国唐代文学国際学術研討会が四川省成都の西南交通大学において開催された。「唐代文学」「成都」「西南交通大学」という三拍子がそろったことで、私は少しの躊躇いもなく成都に駆け戻った。成都に駆け戻るという体験は四川省生まれの私にとっても非常に新鮮であった。私の実家はつい最近まで省の西部、横断山脈の真っ只中のチベット族自治州にあった。しかし、故あって家族が成都の近郊に居を移したため、今回ばかりは気分も新たに、新しくわが故郷となった錦官城に向かうことになったのである。また、今回の学会主催校も、私にとってとりわけ想い出深い大学である。今から四十年前、当時中学生だった私は、推薦されて四川省主催のサマーキャンプに参加した。生まれて初めて青藏高原を下り、道中十日余をかけた長旅の末、向かった先が他ならぬ西南交通大学の峨眉キャンパスであった。この時、峨眉山登山にも挑戦し、山中ここかしこに点在する仏寺道観の門楹や対聯に深く魅入られたことを今なお鮮明に記憶している。これが、私にとって最初の生きた漢字文化体験であった。振り返ってみると、あの夏の一月間はまるで原体験のように、後の私の人生選択に小さからぬ影響を及ぼ

している。このような種々の思いを胸にしまい込み、9月8日、私は成都の北、成都駅の西隣にある西南交通大学九里堤キャンパスに向かった。

今回の学会参加者は140名余り、日本からは、戸崎哲彦(島根大学)、佐藤浩一(東海大学)、鄧芳(富山大学)、黄小珠(大阪大学外国人招聘研究員)の各氏と私の5名が参加した。初日と最終日の午前は開幕・閉幕式と大会発言に充てられ、残りの一日半は四つのグループに分かれての分科会であった。

9日の朝八時から開幕のセレモニーが始まり、すべての活動がスタートした。中国唐代文学学会会長の陳尚君(復旦大学)氏が開幕の辞を述べられた。陳会長は、唐代文学には始めから終わりまで蜀に関わる記載があることを強調され、唐代文学における四川の重要性、文学と四川の深い結びつきについて簡潔に説明された後、「李白はこの地で成長し、杜甫はこの地で成就した」と結んで、開幕を宣言された。陳会長は午後の分科会でも、近年刊行された三種の杜詩全注本について紹介され、それぞれの特徴と価値について総括されている。三種のうちの一つが下定雅弘・松原朗両氏の編、日本の『杜甫全詩訳注』四巻(講談社学術文庫)であった。陳会長の一言に象徴されるとおり、李白と杜甫は今回の学会で最も重要かつホットな論点の一つであった。関連の論文は30篇近い。

予稿集に収められた論文は計130篇に上り、内容も唐代文学に関わるありとあらゆる領域に及ぶ。閉幕式後と閉幕直前の大会発言に限っても、以下に列挙する14篇の最新の成果が披露された(敬称略)。

[9日午前]

1. 祝尚書(四川大学)「論四傑駢文的“当時体”」
2. 莫礪鋒(南京大学)「晚唐詩風の微視考察」
3. 呂正恵(淡江大学)「從李白詩歌的兩大特質談李白的出身問題」
4. 蔣寅(中国社会科学院)「喬億『大曆詩略』与格調詩學的深化」
5. 戸崎哲彦(島根大学)「唐人集本与石本之異及其原因」
6. 俞寧(ウェスト・ワシントン大学)「万古猿声啼不尽：以生態批評理論解析唐詩裏的猿」

[11日午前]

7. 劉燕平(嶺南大学)「卵生、猪首神与鬪雷——論<陳鸞風>与<陳義>中的雷神」
8. 葛景春(河南省社会科学院)「杜甫律詩與絶句的求正



與容變」

9. 李浩(西北大学)「絲路又出新史料：對兩方新見回紇碑誌的録文与初步積述」
10. 張清華(河南省社会科学院)「姚鼐『古文辭類纂』的韓愈古文研究」
11. 周裕鍇(四川大學)「痛感的審美：韓愈詩歌的身体書寫」
12. 胡可先(浙江大學)「新出石刻史料与李德裕相關問題」
13. 廖美玉(逢甲大學)「感春之意——從“詩人在場”談唐代物候詩学的建構」
14. 羅寧(西南交通大學)「伝奇、伝記与小説——对概念和観念的反思」

初唐から晩唐までの各時代、詩歌から古文や駢文、小説に至る各文体がフォローされ、大会発表だけでも唐代文学研究の今が概観できるように構成されていた。また、発表数の多さ(5・9・12)からも、石刻史料に関わる研究が、現今の唐代文学研究にあって格別高い関心をもたれていることがよく分かった。7のような民俗学的アプローチの研究を除くと、他は比較的オーソドックスなテーマといてよいが、いずれも新しい観点や方法論からアプローチされており、私も数多くの新たな知見と大きな刺激を得ることができた。

日本の参加者の発表は、戸崎先生のを除くと、以下のとおりである(敬称略)。

- ・佐藤浩一「日本的唐代文学研究(2014~2015)」(第四組)
- ・鄧芳「元徳秀の時代意義及其文学影響」(第四組)
- ・黄小珠「罷官流徙与典範選撰——論杜甫对陶淵明的收容過程与詩学轉型」(第一組)

ちなみに、私は第二組に属し、「劉方平『月夜』新解」と題する発表を行った。



参加者が100名を優に超える大規模学会の定めというべきか、各人の発表は非常にタイトな時間割で組まれており、そのため要領の悪い私は、発表内容を追いかけるのに汲々として度々消化不良を起こしてしまった。もともと、今回の学会では、すべての論文がネット上にアップされ、参加者は各自ダウンロードして事前に読むことができるシステムになっていたの、この点はむしろ己の不学と準備不足を猛省すべきかもしれない。

分科会は90分ごとにティー・ブレイクの時間が設定されており、会議室の外に飲み物や果物等が用意され、くつろいだ雰囲気の中、他のメンバーと歓談したり、感想を述べ合ったりできたことも、私にとっては新鮮な体験であった。分科会とはいえ、会議中は張りつめた厳粛な空気に包まれるので、浅学非才の私にはとうてい気軽に発言しにくい雰囲気があった。しかし、ティー・ブレイクの時間には、しばしそのような緊張から解き放たれて、率直な感想を伝え合うことができ、グループのメンバーと親交を深めることができたように思う。

今回の学会では、初日午前の全体会議の最後に、特別プログラムが組まれていた。「追思」と題し、——この三十年余の間、台湾と大陸の唐代文学研究をそれぞれ牽引してこられ、この二年の間に相次いで世界された二人の学界功労者——羅聯添・傅璇琬両先生の追悼会が挙行された。生前に親交のあった学者四名が壇上に立ち、両先生が残された學術的功績について語るとともに、両先生にまつわる個人的な思い出をそれぞれ披露された。様々な懐旧のエピソードに耳を傾けながら、私は八年前に参加した安徽省蕪湖の学会(第14届大会、於安徽師範大學)を思い出していた。私は分科会で傅先生と同じグループに属する幸運に恵まれたばかりか、拙い私の発表に対して、傅先生から直接暖かいお褒めの言葉まで頂戴した。親しくお声をかけて下さったあの時の温容とお言葉は、今なお私にとって忘れがたい大事な思い出、大切な宝物となっている。

開会式で台湾の廖美玉先生が述べられた一言が妙に心に残っている。——毎回参加して懐かしい顔ぶれと再会するたびに、ああまた唐代文学学会というわが家に帰ってきたのだなあと感じる、と。今の私にとって、この学会の敷居はまだかなり高いけれども、顔見知りの学者は確かに増えた。願わくは私もこの家になるべく足繁く帰ってきたい、と心ひそかに念じた次第である。

# ❖ 国内学会消息 (平成二十八年)

## 北海道中国哲學會

4月22日

- ・臺灣大學留學記 神宮 萌子

6月24日

- ・懷德堂學派の『論語』解釋—管仲論を中心として— 王 天波

7月1日

- ・廖平『穀梁古義疏』と劉向の春秋說 吉田 勉

7月22日

- ・私が中國文化論講座で學んだこと—2030年の文學部を考える— 三上 雄貴

10月28日

- ・先秦時代の「史」字と「吏」・「事」字 和田 敬典

12月2日

- ・『荀子』性惡説に關する研究 神宮 萌子

2月3日

- ・易の八卦および陰陽五行説の來歴—清華簡『筮法』から見る中國古代の分類觀— 大野 裕司

8月26日 第46回研究發表大會並總會

於北海道大學人文・社會科學總合教育研究棟W408室

- ・『葉隱』における「忠」とは 黄 臻真
- ・日中戦争までの日中關係を改善するための胡適の模索—胡適の日記を中心に— 猪野(胡)慧君
- ・格物解の一傍流 山際 明利
- ・李卓吾『四書評』と葉文通『四書評眼』 佐藤鍊太郎 (和田 敬典 記)

## 北海道大學中國語・中國文學談話會

7月30日 第251回

- ・現代臺灣人のエスニシティをめぐる意識多元化の一局面—中國華中地域の「臺商子女學校」での調査事例をもとに— 金戸 幸子
- ・「多元・多層構造」化する臺灣における社會意識の新たな規定要因の探求—エスニシティは社會意識の規定要因か? 寺澤 重法

刊行物

『饕餮』第24號(9月)

『火輪』第37號(11月)

『連環畫研究』第5號(2月)

(藤井 得弘 記)

## 秋田中国学会

5月21日 春季第162回例会

於秋田大学教育文化学部3号館3階3-343教室

- ・中国の領土問題—新疆、チベット、台湾問題に対する、台湾の専門家、劉學鈔氏の著作紹介 西村 伸平
- ・満洲国作家梅娘の日本経験とその文学 羽田 朝子

11月26日 秋季第163回例会

於秋田大学総合研究棟2階講義室

- ・秋田県出身者の満洲開拓—男鹿での調査報告— 篠田 恭介
- ・荀子思想と『中庸』テキスト 吉永慎二郎 (羽田 朝子 記)

## 東北中国学会

5月28日・29日 第65回大会 於山形大学

第一日

- ・「原左氏伝」と清華大学蔵戦国竹簡(貳)「繫年」における即世と即位 吉永慎二郎
- ・戦前日本における中国イスラーム研究成果と評価 阿里木 托和提

[公開講演]

- ・父の罪惡・汚名を掩蓋(カバー)する—西晋の太常博士 秦秀によせて— 安田 二郎

第二日(中国思想・中国文学分野のみ抜粋)

- ・『詩經』鄭風「子衿」篇の解釈史 高崎 駿士
- ・『韻学楷梯』の反切法について 曾 若涵
- ・殷王称号系統及び関連する甲骨資料の再検討 陳 逸文
- ・江藩『国朝漢学師承記』卷五における「師承」の性格 尾崎順一郎
- ・徐復観と殷海光における「文化観」の比較について 陳 熙 (齋藤 智寛 記)

## 東北シナ学会

2月11日・12日 二月例会

(中国思想・中国文学分野のみ抜粋)

### [卒業論文発表会]

- ・『墨子』の思想について 中島 麻那
- ・『莊子』の至人観一内篇を中心に 藤井 一成
- ・李白詩における飲酒と人間関係について 木村 崇志
- ・『紅樓夢』における林黛玉・薛宝釵と花との関わり

菅 悠理子

- ・魯迅〈故郷〉における「希望」の解釈について

貝瀬 拓也

- ・邱妙津『鱷魚手記』における叙述表現について

小池 珠美

### [修士論文発表会]

- ・東魯古狂生『醒石』第6回「高才生傲世失原形 義気友念孤分半俸」試論—李徴変虎譚の展開をたどる

尾崎 希海

(尾崎順一郎・田島 花野 記)

## 東北大学中国哲学読書会

4月11日 第1回中国中世文化研究会

特集：唐五代の道教と仏教

- ・『玄綱論』中篇について 劉 暁春
- ・『祖堂集』から見た雪峰義存 祝 釗
- ・唐五代禅思想と『首楞嚴経』 齋藤 智寛

6月30日 第2回中国中世文化研究会

特集：魏晋南北朝時代を俯瞰する

- ・『漢魏叢書』と明代諸子学 三浦 秀一

### [学術講演]

- ・内争與外壓中の體國經野之道—東晉政治地理格局的幾個剖面展開 (浙江大学) 陳 健梅

9月9日 第183回中哲学読書会

- ・秩序与定位：馬王堆帛書《経法》篇“形名観”的総体構造—以所見“逆順説”為契機 孟 繁璞
- ・『古文尚書攷』から見た惠棟の治経方法 尾崎順一郎

9月28日 第184回中哲学読書会

### [卒業論文中間発表会]

- ・『易緯乾鑿度』卷上に於ける『周易』十翼の機能 長谷川 郁
- ・李卓吾の出家目的と学問対象との関係 相原 貴次

### [修士論文中間発表会]

- ・漢代初期儒家思想 堤 薫
- 10月19日 第185回中哲学読書会

### [卒業論文構想発表会]

- ・『易緯乾鑿度』の構造と論理 長谷川 郁
- ・李卓吾思想研究—性命探討の行方 相原 貴次

### [修士論文構想発表会]

- ・前漢儒家思想研究 堤 薫
- (尾崎順一郎 記)

## 東北大学中国文学談話会

4月27日 [卒業論文雑誌会]

- ・荒井健氏「李賀の詩：特にその色彩について」について 三好 桃子

7月22日 [卒業論文構想発表会]

- ・李賀の寒冷表現について 三好 桃子

8月21日 [卒業論文中間発表会]

- ・李賀の寒冷表現について 三好 桃子
- (田島 花野 記)



## 筑波中国学会

5月19日

- ・阮籍「詠懐詩」にみる儒教との関わり 村越 充朗

6月9日

- ・劉禹錫の詩における眼前に見ない風景を描く姿勢について 荒川 悠

6月16日

- ・月舟寿桂『東坡詩幻雲抄』考 王 連旺

11月17日

- ・劉禹錫「秋詞二首」について 荒川 悠

12月1日

- ・蘇軾の小字行書「表忠観碑」石刻及び拓本流传考 王 連旺

12月15日

- ・阮籍「詠懐詩」其一について 村越 充朗

12月22日

- ・陶淵明の学びの跡—「集聖賢群輔録」と淵明詩文に即して 宇賀神秀一

刊行物

『筑波中国文化論叢』第35号(10月)

(稀代麻也子 記)

## 中国化学会

6月25日 大会 於東京女子大学

- ・劉禹錫の「金陵五題」を詠ずる姿勢 荒川 悠
- ・蘇曼珠の「本事詩十章」とその和詩 荒井 礼
- ・内閣文庫及南京図書館蔵少室山房本『詩藪』考論 侯 栄川

- ・文選学源流考—蕭該『文選音』を中心に— 樋口 泰裕
- ・章学誠の著述観 渡邊 大
- ・潮州方言動作動詞の史的考察—「引く」動作を中心に— 村上 之伸

[講演]

- ・杜甫はどのように陶淵明を契機としたか 大上 正美

3月12日 例会 於大妻女子大学

- ・銭大昕の『三国志』考証について 高橋 和
- ・元結の銘について 加藤 敏

9月11日 例会 於大妻女子大学

- ・「列異伝」編纂の意義と特徴 高橋 稔

12月10日 例会 於大妻女子大学

- ・李白の詩における「煙」 渡辺 淳美

- ・長尾雨山と呉昌碩の接点について 松村 茂樹  
(内山 直樹 記)

## お茶の水女子大学中国文学会

4月23日 大会

- ・敦煌写本「目連縁起」の特質 伊藤美重子
- ・王安石と江寧 和田 英信

7月2日 7月例会

- ・曹植「洛神賦」の構造について 角 祥衣
- ・五四時期における人力車夫表象—胡適・魯迅・郁達夫の比較を通して 魯 蕓

9月3日 9月例会

- ・郊廟歌辞の形式化に関する一考察—漢から魏晋にかけて 鄭 月超

- ・从焦点理論浅析動詞後的“了”的焦点提示功能 林 如

- ・離合詞的語義対表示人的成分的影響 郝 静
- ・様態描写における“着”と“起来”の意味的相違 許 芸涵

12月3日 12月例会

- ・「水のなかの何か」再考—古典詩における水中倒影表現 水津 有理

- ・耶律楚材の詩人像について 白 蓮杰

- ・『台湾を知るための60章』刊行をめぐって 赤松美和子

(竹野 洋子 記)

## 六朝学術学会

3月14日 第32回研究例会 於二松學舎大学

- ・南朝詩歌作品における「隴」—現実と想像のあいだ 西川 ゆみ

- ・『世説新語』の編纂意図 渡邊 義浩

- ・魏晉時代の社の歴史的特質—当利里社残碑の検討を中心に— 福原 啓郎

12月18日 第33回研究例会 於二松學舎大学

- ・許懋の学術とその時代 洲脇 武志

- ・謝靈運「撰征賦」をめぐる若干の考察 原田 直枝

- ・顔之推における仏教と儒教 渡邊 義浩

6月18日 第20回大会 於二松學舎大学

- ・南朝齊梁艷詩に見える「内人」「中人」について 大村 和人

- ・北朝における非漢語をめぐる雑考 池田 恭哉
- ・「文」概念の成立における班固の位置—六朝文論の原点として— 牧角 悦子
- ・唐詩に見る六朝詩の受容—王昌齡の「芙蓉楼送辛漸」詩の旅立つ人に伝言を託す構想と伝言内容を中心に 矢嶋美都子

[記念講演]

- ・六朝時代の都督府とその属僚たち 石井 仁
- 刊行物  
『六朝学会報』第17集(3月)  
(大村 和人 記)

中唐文学会

- 10月7日 第27回大会 於奈良女子大学
- ・張昺の雨の詩について 白石 尚史
  - ・皮陸唱和詩に詠じられる「苦雨」について 大山 岩根
  - ・劉禹錫の朗州左遷時における詩作行為について 荒川 悠

[講演]

- ・「もの」と「こと」を越えて 川合 康三
- 刊行物  
『中唐文学会報』第23号  
(姜 若冰 記)

日本宋代文学学会

- 5月31日 第3回大会 於九州大学伊都キャンパス
- ・北宋古文復興における「怪奇」の変遷 渡部 雄之
  - ・黄州左遷期の蘇軾について—「寒食雨二首」に見える「死灰」の考察を中心に— 室 貴明
  - ・陸游「釵頭鳳」詞と沈園故事—宋詞と“Culture of Romance”— 甲斐 雄一
  - ・元代以降における『太平広記』の受容状況について—『太平広記』の一般名詞化の可能性— 西尾 和子
  - ・劉辰翁の『鞞川集』評について—「漸可語禪」を中心に— 紺野 達也
  - ・日本詩話中的楊万里接受研究 楊 理論
  - ・范仲淹の神道碑銘をめぐる周必大と朱熹の論争—歐陽脩新発見書簡に着目して— 東 英寿
- シンポジウム「文学テキストの編纂と流伝」  
司会：浅見 洋二

- ・歐陽脩の文学評価論—以宋人文集流传演變の内容為主所作的探討— 王 基倫
- ・『歐陽文粹』編纂之意義 謝 佩芬
- ・行記と文集編纂—范成大、陸游、周必大行記と筆記探討— 張 蜀蕙
- ・詞譜の發展と唐宋詞研究 萩原 正樹  
(浅見 洋二 記)

日本聞一多学会

- 7月30日 於二松學舎大学九段キャンパス
- ・唐代詩人劉方平「月夜」詩の解釈をめぐる 益 西 拉 姆
  - ・様式と「意境」—絶句・律詩・現代詩から考える 鄧 捷
  - ・聞一多の詩と學術 牧角 悦子
  - ・『杜甫全詩訳注』の刊行—聞一多「少陵先生年譜会箋」に及ぶ 松原 朗
- 刊行物  
『神話と詩』第15号(2017年3月)  
(野村 英登 記)

日本漢詩文学会

- <https://nihonkanshibun.jimdo.com/>
- 3月5日 第7回例会 於共立女子大学
- ・二胡演奏「陽関三疊」 林 美希
  - ・『孟子』における舜—弟への対応を中心に 鈴木 絢子
  - ・朱子の教学と書院—江戸の学びへの影響 戸丸 凌太
  - ・京都学習院の丁祭—幕末公家の孔子祭祀の一形態 橋本 佐保
  - ・填詞朗読—李煜「虞美人」「浪淘沙令」 閻 瑜  
(作品解説) 宇野 直人
  - ・朱子の自警詩—流情の戒め 松野 敏之
  - ・日中共同企画『漢詩名作集成』について—企画の経緯と執筆方針など 宇野 直人
- 9月3日 第8回例会 於共立女子大学
- ・小曲演奏 田丸信明「森の貨物列車」  
(ピアノ弾奏) 宇野 直人
  - ・「鞞韃」詩の系譜とその英訳について ガイ・ホップス
  - ・元雜劇「漢宮秋」作品解説 宇野 直人
  - ・王昭君伝説と能「昭君」—「白桃」「王母」を中心として 中嶋 諒
  - ・フランスの日本文化受容の一面 増野 弘幸

- ・熊本の漢学者月田蒙斎とその詩について 中村 昌彦
- ・長尾雨山と夏目漱石 田山 泰三
- ・『倉田貞美著作集』の刊行について 田山 泰三
- ・伊福部隆彦の『老子』解釈について 林口 春次

5月7日 活動 於共立女子大学

- ・林瓊泉先生(熊本県漢詩連盟事務局長)激励会

12月10日 活動 於八王子市御衣公園内、高尾天神社

- ・第2回史跡探訪  
菅原道真公銅像(昭和5年、渡辺長男作)

刊行物

『日本漢詩文学会会報』創刊号(6月)

『漢詩名作集成』中華編

宇野直人著(3月、明德出版社)

『漢詩名作集成』日本編

李寅生著、宇野直人・松野敏之監訳(3月、明德出版社)

詩集『凌雲風雅』創刊号(6月、熊本・凌雲吟社)

『日本漢詩文学会会報』第2号(12月)

(松野 敏之 記)

## 國學院大學中國學會

1月9日 第210回例会

- ・後漢・朱穆「与劉伯宗絶交詩」について 宮内 克浩
- ・周思得修集『上清靈寶濟度大成金書』に見る儀礼節次について 浅野 春二

10月22日 第211回例会

- ・楚辭に於ける「世」の認識—「世」と「溷濁」との関係性— 前園 悠太
- ・『困學紀聞』「孟子」小考 齋藤 成治

6月4日・5日 第59回大会

[公開講演]

- ・山と向き合う 川合 康三
- ・鄭玄における「知」と「智」 長谷川清貴
- ・高大一貫の漢文教育 渡辺 正一
- ・ココロをカタチに一段注のいくつかの助詞を例に— 大橋 由美
- ・死者追善儀礼の道教的展開—十王信仰をめぐって— 田中 文雄

研究会

- ・漢代文学研究会(毎週木曜日)—『漢紀』を読む— 宮内 克浩
- ・唐代文学研究会(毎週火曜日)—唐詩を読む— 赤井 益久/川合 康三

- ・宋代文学研究会(毎週木曜日)—『蘇軾全集校注』を読む— 石本 道明
- ・中国現代文学研究会(毎週木曜日)—謝冰心作品を読む— 牧野 格子

- ・中国礼俗文化研究会(毎週火曜日)—『無上九幽放赦告下眞科』を読む— 浅野 春二

3月20日 中國學會奨励賞表彰

- ・早田ひかり『『孔子家語』「無声之楽」小考—「和」との関係をめぐる—』(卒業論文)

刊行物

學會誌『國學院大學中國學會報』第62輯

機關誌『崑崙』第214号～第216号

(青木 洋司 記)

## 国士館大学漢学会

12月17日 第51回大会

- ・北京師範大学留学(帰朝報告) 長屋めぐみ
- ・日中友好大学生訪中団報告 本田 美穂

[卒業論文発表]

- ・詩における植物の詠い方 廣瀬 大亮
- ・曹丕研究 永田 諒乃

[特別講演]

- ・再考漢文訓読—中国文化の受容と翻訳— 山邊 進

12月17日 第5回詩文朗読コンテスト

- ・課題文「四面楚歌」

刊行物

『國士館大學漢學紀要』第18号

(鷲野 正明 記)

## 日本詞曲學會

詞籍「提要」譯注検討會

6月18日・19日 於立命館大學文學部

『四庫全書總目提要』「詞曲類」の譯注および検討

『唐宋名家詞選』譯注検討會

3月6日・7日・8日於日本大學商學部

9月9日・10日・11日 於東海學園大學

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

小風絮會(『唐宋名家詞選』譯注)

1月23日・5月7日・6月4日・7月30日・

11月12日・12月24日 於立命館大學文學部

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

刊行物

『風絮』別冊 龍榆生編選『唐宋名家詞選』唐五代編(3月)

『風絮』第13號(12月)

(池田 智幸 記)

早稲田大学東洋哲学会

6月11日 第33回大会

- ・『禮記』燕義篇の成書過程と「義」の役割 黒崎 恵輔
- ・江西時代における王陽明の乞休・歸省疏をめぐって

劉 珉

- ・法藏撰『梵網經菩薩戒本疏』の特色について—智顛説『菩薩戒義疏』との比較—

胡 建明

- ・『溪嵐拾葉集』に見られる禪宗觀—三根についての理解をめぐって—

ステファン・リチャ

- ・マドゥッサーダナ・サラスヴァティーによるアートマンの四状態説の構造

眞鍋 智裕

- ・安慧の「識の顯現」への視點—*Madhyāntavibhāgaṭikā* におけるnir-√bhāsの用法について—

伊藤 康裕

- ・羅欽順『困知記』に内在する理論的矛盾をめぐって

金 香花

[講演]

- ・最澄と空海 武内 孝善

刊行物

『東洋の思想と宗教』第33号(3月)

(江波戸 互 記)

早稲田大学中国文学会

6月25日 第41回春季大会 於文学部第一会議室

- ・晩唐の詩僧の作品に見る「氷」 前田 量子
- ・江戸女性漢詩人原采蘋の『采蘋詩集』から見える遊歴の

感覚 柯 明

- ・意符の「不」について 高山 亮太

[講演会]

- ・嘉靖本『西廂記』について 金 文京

11月26日 第41回秋季大会 於文学部第一会議室

- ・陳独秀における旧詩の意義 郭 濟飛
- ・王家衛の映画にみる「香港人」像—『欲望の翼』、『花様年華』、『2046』を中心に

張 宇博

- ・叙情と叙事—森槐南における中国戯曲観の形成

中村 優花

[講演会]

- ・『愛国白話報』の言語について

落合 守和

刊行物

『中国文学研究』第42輯(12月)

(石 ますみ 記)

名古屋大学中国哲学研究会

2月16日 第82回研究会[留学報告]

- ・浙江大学における一年 丹羽 健

- ・南京大学での漢語学習 安立 哲人

3月24日 第83回研究会

- ・『喫茶養生記』に見る仙薬としての茶 張 名揚

7月20日 第84回研究会

- ・呂才と『陰陽書』 李 錚

9月7日 第85回研究会

[修士論文中間発表]

- ・中国における初期佛教思想と牛の比喩 丹羽 健

10月31日 第86回研究会 [卒業論文中間発表]

- ・吳棫の書禪伝について 伊藤 哲

刊行物

『名古屋大学中国哲学論集』第15号(5月)

(小崎 智則 記)

名古屋大学中国文学研究室研究談話会

11月12日 中部地区中文交流会

於名城大学天白キャンパス

- ・五山禅僧における王勃受容の一端 林 美江

[講演]

- ・楊家将故事の新資料『出像楊文広征蛮伝』について

松浦 智子

- ・文学作品の評価を考える—一字文護母子の書簡文を中心に—

福井 佳夫

9月20日 研究談話会

[修士論文及び卒業論文構想発表]

- ・五山禅僧における王勃「滕王閣序」及び「滕王閣」詩の受容

林 美江

- ・『三国志演義』における八陣図の研究

五藤 嵩也

10月18日 [卒業論文構想発表]

- ・『家誠』をめぐる嵇康の人物像について

加藤 薫

- ・李商隠詩歌中における月の描き方について

長谷川浩平

10月25日 [卒業論文構想発表]

- ・陸游の詠雨詩について 中根 彩美
- ・梅堯臣の悼亡詩—中国悼亡詩史における位置— 袴田 悠太

2月24日 [卒業論文及び修士論文まとめ発表]

- ・李商隱詩歌中における月の描き方について 長谷川浩平
- ・五山禅僧における王勃「滕王閣序」の受容について 林 美江

刊行物

『名古屋大学中国語学文学論集』第30輯(2017年3月)

付記

名古屋大学大学院文学研究科中国文学研究室は、来年度より国際言語文化研究科・国際開発研究科国際コミュニケーション専攻とともに、人文学研究科文芸言語学コース中国語中国文学分野・専門となります。今後ともお引き立てくださいますようお願い申し上げます。

(大島 絵莉香 記)

京都大学中国文学会

7月23日 第31回例会 於文学部新館第3講義室

- ・琵琶曲「啄木」考—宋代文人の聴いた音楽 早川 太基
- ・神山の姿容—崑崙山の描写を中心に— 大野 圭介
- ・身と心—白居易の「自戯三絶句」をめぐって考えたこと 中原 健二

3月17日 講演会 於文学部新館第3講義室

- ・征帆一片繞蓬壺—一読『三国志・魏志・東夷・倭人伝』 (復旦大学) 戴 燕

6月24日 講演会 於中国語学中国文学研究室

- ・明清文人的西南叙事 (中央研究院中国文哲研究所) 胡 曉真

刊行物

『中国文学報』第86冊(2015年10月付)

『中国文学報』第87冊(2016年4月付)

(緑川 英樹 記)

東山之會

2月20日 於京都女子大學

- ・本文載體的轉換與文學的傳播—關於《九老圖詩》進入白集過程與《白氏文集》七十卷形成時間考述 查 屏球

3月26日

- ・北宋文壇師承譜系與文人社會網絡的拓展 汪 超

4月23日

- ・郭象の『莊子注』と『管家文草』—逍遙遊篇の三章の連作をめぐって 李 現

6月18日

- ・晚明小品から五四散文への影響—『文飯小品』をめぐって 趙 偵宇

7月23日

- ・異域的復活—日本江戸時代的楊萬里接受 楊 理論

9月24日

- ・自然風景の窓—茶掛けの詩 馮 艶

11月26日

- ・杜牧撰『注孫子』と趙蕤撰『長短經』—杜牧の「仁義」という語をめぐって 高橋 未来

12月24日

- ・則天武後の昊天祭祀歌辭 加藤 聰

2月20日~12月24日

『長江集』譯註

卷三「題皇甫荀藍田廳」至「送烏行中石淙別業」

(加藤 聰 記)

大阪大学中国学会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/xuehui/index.htm>

12月10日・11日

国際シンポジウム「儒学—蜀学と文献学—」

大阪大学中国学会、四川大学古籍整理研究所、科研「懷徳堂の総合的研究」、科研「中国新出土文献の思想史的研究」、名阪交流会との合同で開催。於大阪大学

- ・從歴史地理看蜀学的包容性 王 小紅
- ・廖平の公羊学—『何氏公羊解詁三十論』を中心として— 田中 千寿
- ・宮内庁書陵部蔵『春秋経伝集解』より見た清原家の『春秋正義』受容について 竹内 航治
- ・20世紀中国『左傳』整理成就評析 張 尚英
- ・戦国期における子産像—儒家系文献を中心に— 中村 未来
- ・懷徳堂教授・吉田鋭雄と蜀人・查体仁『学庸俗話』 白井 順
- ・柏木如亭とその中国詩学の受容—『詩本草』を中心として— 趙 蕊蕊
- ・生日における孝の系譜 佐野 大介



- ・懐徳堂文庫新収資料中の太田源之助旧蔵資料  
竹田 健二
- 刊行物  
『中国研究集刊』第62号[光号](6月)  
『「儒学—蜀学と文献学—」国際シンポジウム論文集』(12月)  
(湯浅 邦弘 記)

### 懐徳堂研究会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kaitoku-s/index.html>

3月29日 第23回研究会 大阪大学文学部中庭会議室

- ・五井蘭洲の『莊子』理解(その1) 湯城 吉信
- ・中井履軒の京都市について 寺門日出男
- ・尾藤二洲の朱子学と懐徳堂の朱子学と 藤居 岳人
- ・懐徳堂デジタルアーカイブの新展開 湯浅 邦弘
- ・懐徳堂の新しい図録制作について 湯浅 邦弘
- ・懐徳堂記念会新収資料について 湯浅 邦弘
- ・次年度の活動について 竹田 健二

6月19日 第24回研究会 大阪大学文学部中庭会議室

- ・五井蘭洲の『莊子』理解(その2) 湯城 吉信
- ・懐徳堂文庫新収資料・整理番号42~45の四点について  
竹田 健二
- ・東アジア文化交渉学会第8回大会の報告 竹田 健二

8月22日 第25回研究会 大阪大学文学部中庭会議室

- ・五井蘭洲の学派理解—五井蘭洲の『莊子』理解(その3)  
湯城 吉信
- ・五井蘭洲と中井履軒の格物致知論 佐藤 由隆
- ・土佐儒官山本家と大坂の儒者—寒泉・東岐・南岳  
矢羽野隆男

- ・懐徳堂文庫新収資料と太田源之助 竹田 健二

5月8日 東アジア文化交渉学会第8回国際シンポジウム  
於関西大学

パネル28「大阪の漢学と文化交渉—懐徳堂を中心に」

- ・懐徳堂研究とデジタルアーカイブ事業 湯浅 邦弘
- ・西村天因の懐徳堂研究と五井蘭洲関係資料  
竹田 健二
- ・幕末懐徳堂の情報環境—島津久光の率兵上洛を中心に—  
矢羽野隆男
- ・中井履軒の「徳」解釈について 池田 光子
- ・五井蘭洲と古義学 寺門日出男

刊行物

『増補改訂版懐徳堂事典』

(湯浅邦弘編著、10月、大阪大学出版会)

『懐徳堂の至宝—大阪の「美」と「学問」をたどる—』  
(湯浅邦弘著、10月、大阪大学総合学術博物館叢書13、大阪大学出版会)

(湯浅 邦弘 記)

### 中国出土文献研究会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/sokankenkyukai/index.html>

7月16日—17日

第63回研究会 於大阪大学中国哲学資料室

- ・銀雀山漢墓竹簡「四時令」篇の時令説について  
梶島 雅弘
- ・清華簡《管仲》帝辛事蹟探討 曹 方向
- ・北京大学蔵西漢竹書『蒼頡篇』の編聯復原  
福田 哲之
- ・新出資料情報 草野 友子
- ・北京大学蔵西漢竹書『陰陽家言』について  
湯浅 邦弘

11月23日 第64回研究会 於京都大学人文科学研究所

- ・従「臣妾」「奴妾」到「奴婢」 (武漢大学) 陳 偉

9月4日 国際学術交流

湯浅邦弘・福田哲之・竹田健二・草野友子が上海博物館を訪問し、上海博物館蔵戦国楚竹書(上博楚簡)『緇衣』『卜書』『邦人不能』、『陳公冶兵』を実見調査した。また、博物館の葛亮研究員と会談した。

刊行物

『竹簡学入門—楚簡冊を中心として—』

(陳偉著、湯浅邦弘監訳、草野友子・曹方向訳、12月、東方書店)

(湯浅 邦弘 記)



## 中国四国地区中国学会

6月11日 第62回大会 於徳島大学

- ・何遜と劉孝綽の詩について 佐伯 雅宣
  - ・韓愈の「王維白鸚鵡賦碑」について—その真贋問題を中心に— 内田 誠一
  - ・『易緯』爻辰説の考察 藤田 衛
  - ・哲学研究としての「朱子」の可能性 溝本 章治
  - ・楊萬里の性説と工夫論—「中庸」の解釈を中心として— 望月 勇希
  - ・豊子愷と李叔同(弘一法師)—師弟関係から見た李叔同(弘一法師)の影響について 木村 泰枝
- [講演]
- ・変貌するチャイナタウン—神戸南京町の形成と展開 高橋 晋一  
(田中 智行 記)

## 広島大学中国思想文化学研究室研究会

第196回研究会 2月10日

- [卒業論文発表会]
- ・羿の二面性について—『淮南子』と『左伝』を中心— 有川久美子
  - ・王充『論衡』における「道家」について 槇野晃太郎
  - ・朱子『小学』研究 森 泰平
- [修士論文発表会]
- ・楊万里心学思想の研究 望月 勇希
  - ・中日孟蘭盆会の比較—本地の宗教信仰との融合を中心に— 李 金芳
- 第197回研究会 10月29日
- [卒業論文中間発表会]
- ・室鳩巢思想の研究—加賀藩時代を中心— 太田 若葉
- [修士論文中間発表会]
- ・石田梅岩心学思想の研究—「心性ノ沙汰」「商人ノ道」を中心に— 日下 理
- [卒業論文テーマ発表会]
- ・緯書における感生帝説について 大竹晋太郎
  - ・記紀神話における漢籍受容の研究 吉岡 佑馬

刊行物(発行人 東洋古典學研究会)

『東洋古典學研究』第41集(5月)

『東洋古典學研究』第42集(10月)

(有馬 卓也 記)

## 広島大学中国文学研究室研究会

1月29日 第194回

- [修士論文中間発表会]
- ・六朝「舞詩」研究—梁代を中心に— 胡 兮
  - ・梅堯臣詩研究—許昌期を中心に— 大井 さき
- 2月20日 第195回
- [卒業論文最終発表会]
- ・『金瓶梅』における女性描写—容姿の表現を中心として— 河田 結衣
- 6月27日 第196回
- [修士論文最終発表会]
- ・六朝「詠舞詩」研究—梁代を中心に— 胡 兮
  - ・梅堯臣詩研究—許昌期を中心に— 大井 さき
- [修士論文中間発表会]
- ・容与堂本『水滸伝』に付された評語「畫」について 橋本 夏樹
  - ・菅原道真詩に見られる文選語 黄 柏宗
- [修士論文構想発表会]
- ・菊の風情—菅原道真における元白詩の受容— 馮 徳娟
  - ・江戸の女流詩人に関する研究—梁川紅蘭を中心に— 銭 心怡
- 7月26日 第197回
- [卒業論文中間発表会]
- ・何遜の自然描写について 藤田 早紀
  - ・『水滸伝』における入回詩 金平 侑子
- 11月29日 第198回
- [卒業論文中間発表会]
- ・何遜における夕暮れの詩について 藤田 早紀
  - ・『水滸伝』の入回詩 金平 侑子
- 12月16日 第199回
- [修士論文中間発表会]
- ・『紅蘭小集』所収の題画詩をめぐって 銭 心怡
- [修士論文構想発表会]
- ・『紅樓夢』詩詞の研究 陳 雲鵬
- 刊行物
- 『中国学研究論集』第34号(4月)
- (川島 優子 記)

## 中国中世文学会

10月29日 平成28年度研究大会

於広島大学東千田キャンパス

- ・唐代伝奇小説「定婚店」をめぐるいくつかの問題について  
高西 成介
- ・慶暦後期の梅堯臣詩について  
大井 さき
- ・『新編醉翁談録』の描写の特徴について  
孟 夏
- ・清代詩社と記録  
市瀬 信子
- ・孫猛「日本国見在書目詳考」について  
神鷹 徳治
- ・熊野切「白氏文集」について  
千葉 仁美

1月14日 例会 於広島大学文学研究科

- ・唐詩における形式と内容—近体詩の成立をめぐる—  
田中 美帆
- ・杜甫馬詩訳注  
金吉 佑治

1月28日

- ・菊の風情—菅原道真における元白詩の受容—  
馮 徳娟
- ・『現代漢語描写語法』序論の訳注について  
小山佐和子
- ・江戸の女流詩人—梁川紅蘭を中心に—  
銭 心怡

4月28日

- ・北宋古文復興における「怪奇」の変遷  
渡部 雄之

5月26日

- ・『新編醉翁談録』の成立について  
孟 夏

6月2日

- ・容与堂本『水滸伝』に見られる評語「畫」について  
橋本 夏樹

6月16日

- ・梅堯臣詩研究—許昌期を中心に—  
大井 さき
- ・六朝「詠舞詩」研究—梁代を中心に—  
胡 兮

6月23日

- ・菊の風情—菅原道真における元白詩の受容—  
馮 徳娟
- ・梁川紅蘭の詩学教養について  
銭 心怡
- ・菅原道真詩に見られる文選語—月詩を中心に—  
黄 柏宗

7月7日

- ・杜甫「房兵曹胡馬」詩の批評について  
金吉 佑治
- ・明清楽における『西廂記』故事の受容について  
樊 可人

10月20日

- ・慶暦後期の梅堯臣詩について  
大井 さき
- ・『新編醉翁談録』描写の特徴について  
孟 夏

11月1日

- ・杜甫「観公孫大娘弟子舞剣器行並叙」的思想性  
馮 建国

12月8日

- ・『紅蘭小集』所収の題画詩をめぐる—  
銭 心怡
- ・『紅樓夢』詩詞の研究  
陳 雲鵬

刊行物

『中国中世文学研究』第67号(3月)

『中国中世文学研究』第68号(9月)

(川島 優子 記)

## 山口中国学会

12月17日 於山口大学人文学部2号館第5講義室

- ・『萬物聲音』の「音解」—発音表記について  
李 夫平
- ・宗族が造り出す家屋、家屋が創り出す宗族  
小林 宏至  
(根ヶ山 徹 記)



## 九州中国学会

5月14日・15日 第64回大会 於活水女子大学

- ・宋之問の「明河篇」について 種村由季子  
[講演]
- ・長崎聖堂—『聖堂祭酒日記』から— 若木 太一  
[講演]
- ・九州の地で中国学を学ぶことの現代的意義 吉田 公平
- ・動詞接辞の「了1」と文末助詞の「了2」の機能に関する考察 劉 轟
- ・吳方言における古匣母細音字・喻母字の声母表記について—中古音からの変化発展という観点からのアプローチ— 平田 直子
- ・四君子から治水人物へ—春申君の人物形象における形成と伝承について— 中村 貴
- ・中国・台湾における日本近代文学の受容 秋吉 收
- ・許地山(落華生189~1941)著「解放者」について 松岡 純子

刊行物

『九州中国学会報』第54巻(5月)

(中里見 敬 記)

## 九州大学中国文学会

1月30日 第285回中国文藝座談会

- ・六朝遊仙譚と「桃花源記」 松澤日南子
- ・『世説新語』の読まれ方 古野亜莉沙
- ・李商隱の詠史詩について 南里 有哉
- ・イザベラ・バードの東アジア紀行について 李 多寅
- ・謝冰心の見た日中友好 高橋 由季
- ・施蛰存と雑誌『現代』 柏木 万里

3月5日

- ・李白の「俠」について 孫 亜秋
- ・荊州時代の黄庭堅の詩と薬 蒙 顕鵬
- ・蘇詞集編纂のはじまりと変遷 原田 愛
- ・白居易遺詩遡源一日傳『白氏文集』古抄卷六十五巻校異— 查 屏球

4月23日 第287回中国文藝座談会

- ・宋之問と則天武后 種村由季子
- ・元稹と沈氏一族 長谷川真史

7月16日 第288回中国文藝座談会

- ・目加田誠の人生と杜甫の詩情 静永 健

・周必大の『歐陽文忠公集』編纂と歐陽脩新発見書簡

東 英寿

・目加田誠北平時代の写真について

静永 健

9月17日 第289回中国文藝座談会

・服部南郭の擬古論—李攀龍との比較を中心に

陳 艶

・孫楷第による東京所見中国小説調査について

稲森 雅子

・『東文選』所収の辞賦類作品の特徴について

栗山 雅央

11月4日 第290回中国文藝座談会

・阮步兵詩詠の是什麼懐

鍾 東

・王梵志詩集在日本—論山上憶良と杜甫詩的關係—

静永 健

・杜甫「觀公孫大娘舞劍器行并叙」的思想性

(山東大学) 馮 建国

刊行物

『中国文学論集』第45号

(長谷川 真史 記)



## ❖ 平成29・30年度各種委員会の構成

◎：委員長 ○：副委員長 ◆：幹事

### 大会委員会

◎赤井 益久 ○佐竹 保子 坂井多穂子  
 谷口 洋 東 英寿 三上 英司  
 諸田 龍美 卯 和順 ◆鈴木 崇義

### 論文審査委員会

◎大木 康 ○浅見 洋二 ○渡邊 義浩  
 井川 義次 市來津由彦 伊東 貴之  
 大西 克也 岡崎 由美 木津 祐子  
 小松 謙 近藤 浩之 白水 紀子  
 中島 隆博 野間 文史 町 泉寿郎  
 柳川 順子 横手 裕 ◆関 俊史

### 出版委員会

◎釜谷 武志 ○静永 健 佐々木 睦  
 佐々木勲人 三浦 秀一 緑川 英樹  
 森賀 一恵 湯浅 邦弘 ◆佐藤 浩一

### 選挙管理委員会

◎松原 朗 ○河野貴美子 恩田 裕正  
 種村 和史 陳 捷 吉田 篤志  
 鷺野 正明 ◆松野 敏之

### 研究推進・国際交流委員会

◎宇佐美文理 ○藤井 省三 吾妻 重二  
 玄 幸子 松村 茂樹 ◆福谷 彬

### 広報委員会

◎垣内 景子 ○二階堂善弘 辛 賢  
 仙石 知子 ◆高橋 康浩

### 将来計画特別委員会

◎神塚 淑子 ○上田 望 佐藤 正光  
 長尾 直茂 早坂 俊廣 松江 崇  
 ◆小崎 智則



## ❖ 委員会報告

### 論文審査委員会

委員長 大木 康

#### ○学会報第69集応募論文の審査の経緯

2017年1月15日(消印有効)締め切りの応募論文は全43篇(哲学・思想部門9篇、文学・語学部門31篇、日本漢学部門3篇)であった。1月25日に論文審査委員会を開催し、論文1篇につき3名の査読委員(論文審査委員会委員1名を含む)を決めた。

3月25日開催の論文審査委員会で、査読委員3名の査読結果をもとに、哲学・思想部門4篇、文学・語学部門11篇、日本漢学部門1篇の計16篇の掲載を決めた。

#### ○その他、3月25日の論文審査委員会での審議決定事項

- ・学会報第70集依頼論文執筆候補者(評議員2名、一般会員2名)を決定し、理事会に推薦することとした。
- ・哲学・思想部門から1名の学会賞候補者を決定し、理事会に推薦することとした。あわせて、受賞理由執筆者を決めた。
- ・学会ホームページに掲載する「研究集録」(大会次世代シンポジウムの報告)の閲読者を決定した。
- ・「日本中国學會報論文執筆要領」の改訂案を審議し、理事会にはかることとした。

400字詰原稿用紙55枚の規定と、30字×40行のワープロ原稿との間のズレにより、投稿原稿の枚数調査が困難をきわめている。また、現在投稿論文はほぼすべてがワープロ入力による原稿になっている。こうした状況に鑑み、「論文執筆要領」の枚数規定を、ワープロ入力を基準とした枚数規定とすることにしたい。70集以降の投稿予定者は、執筆要領改訂の可能性があるので、ご注意いただきたい。

#### ○日本学術振興会賞の推薦について

評議員からの推薦にもとづき、理事長、副理事長及び論文審査委員会の審議を経て、平成29年度の日本学術振興会賞の候補として、甲斐雄一会員を日本中国学会より推

薦することとした。主たる対象は、同氏の著書『南宋の文人と出版文化 王十朋と陸游をめぐって』(九州大学出版会 2016年)である。

### 広報委員会

委員長 垣内 景子

広報委員会は、ホームページの管理・更新を主な任務としている。今年度も、通常の更新業務を随時行なった他、様々なお知らせを掲示した。今後は、外部団体からの各賞や奨学金の情報、中国学関係の採用情報、及び各種講演会・研究会等のお知らせ等をさらに充実させ、中国学に携わる者にとっての情報の集積所となれるよう努めてゆきたい。また、より見やすく使いやすいホームページを目指して、様々な工夫を試みるつもりである。



## ❖ 事務局より

### ◎住所等の変更と会員名簿への掲載について

住所や所属機関の変更につきましては、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。電子メール、郵便、ファックス、あるいは会費納入時の振込用紙(ゆうちょ銀行払込取扱票)通信欄をご利用ください。

今年度10月発行の会員名簿には、8月末日までにお知らせいただいた会員情報を掲載いたします。それ以降の変更については次年度の掲載となりますので、ご了承ください。なお、以前は固定電話の番号(自宅または勤務先)のみを掲載しておりましたが、2013年度から携帯電話の番号も掲載できることといたしました。携帯番号を掲載することを希望される場合は、事務局までご一報願います(ご本人からのお申し出がない限り、既にご登録いただいている携帯番号を掲載することはありません)。

### ◎クレジットカードによる会費決済について

前号でお知らせした通り、今年度より、海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を開始いたします。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページのURLをお送りいたします。なお、利用可能ブランドはVISA・MASTERのみです。ご了承ください。

日本中国学会事務局

メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

郵便：〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25  
斯文会館内

ファックス：03-3251-4853

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：00160-9-89927

加入者名：日本中国学会



### 訃報

前号発行以降、次の方々のご逝去の報が届きました。  
謹んでご冥福をお祈りいたします。

(敬称略)

山田 和雄 (中部地区)	2011年12月23日
福田 殖 (九州地区)	2016年10月21日
荒木 見悟 (九州地区)	2017年 3月22日

# 第69回大会開催のお知らせと研究発表の募集

会員各位

陽春の候、会員各位におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第69回大会は山形大学が準備を担当し、本年10月7日(土)、8日(日)の両日に山形大学小白川キャンパスにて開催することになりました。

つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、奮ってご応募くださいますようお願い申し上げます。

2017年4月吉日

日本中国学会第69回大会準備会代表

西上 勝

記

1. 部 会 : 一、哲学・思想  
二、文学・語学  
三、日本漢文(日本漢学・日本漢詩文・漢文教育など)  
四、パネルディスカッション(次世代シンポジウム)
2. 時 間 : 一～三は発表 20分に質疑応答 10分、四は報告、質疑応答含め全体で120分以内
3. 縮 切 : 6月30日(金)(当日消印有効)
4. 応募方法 : 研究発表は、学術研究の最新の成果で、未発表かつ未公開のものに限ります。  
一～三に応募される方は、氏名(フリガナ・所属)・希望発表部会・連絡先メールアドレスを明記の上、発表題目および概要(800字以内、日本語による)を、大会準備会まで郵送すると同時に、その電子ファイルをEメール(データ添付)により期日までに送付してください。  
四に応募される場合は、パネルの代表者がパネリスト全員の氏名(フリガナ、所属、メールアドレスも明記のこと)、パネルの題目と概要(1,200字以内、日本語による)を、上記と同様の方法により、大会準備会に送付してください。  
※執筆による校正はありませんので、完全原稿でお願いします。
5. 応募資格 : 研究発表の応募には、本学会会員資格が必要です。特に、四については、パネリスト全員の本学会会員資格が必要となります。新入会員の方は、応募申し込み締切日までに、会費の振り込みが必要となりますのでご注意ください。
6. 応募宛先 : 〒990-8560 山形市小白川町一丁目4番12号  
山形大学人文社会科学部 内  
日本中国学会第69回大会準備会 西上 勝 宛  
E-mail: masaru@human.kj.yamagata-u.ac.jp

◎ 本年は、一、哲学・思想 二、文学・語学 三、日本漢文、四、パネルディスカッションの四部会を予定しておりますが、応募状況によって調整することも考えております。各部会の発表は、質疑応答も含めて日本語でお願いします。また、応募者多数の場合は、やむを得ずご発表をお断りすることもございますので、ご了承ください。

◎ パネルディスカッションには年齢制限はありませんが、次世代を担う若手研究者からの応募が歓迎されます。またパネルの内容は、学会ホームページに「研究集録」として掲載される予定です。

◎ 大会開催時に、山形市で山形国際ドキュメンタリー映画祭2017が、10月5日から12日までにわたって開催されます。山形市街の宿泊施設の確保は難しくなります。早目のご予約をお願いします。

◎ 大会当日、キャンパス内に託児室を開設する予定です。詳細は大会要項に記載させていただきます。

【問合せ先】 E-mail: masaru@human.kj.yamagata-u.ac.jp (大会準備会事務局)

TEL: 023-628-4813 (西上)